



AJEL

日本ラテンアメリカ学会 会 報



AJEL

2009年3月6日

No. 98

1. 理事会報告

○第125回理事会

2. 研究部会報告

3. 研究部会開催案内

4. 近著紹介

5. 事務局から

1. 理事会報告

○第125回 理事会議事録

日時：2月11日(水・祝)14:00~17:15

場所：東京大学駒場キャンパス18号館コラボ
レーションルーム2

出席者：二村、星野、村上、飯島、浦部、
狐崎、石橋、岸川、谷、田中(書記)

欠席者：落合、小池

<報告事項>

(1)第30回定期大会の準備状況

・鈴木大会実行委員長より、6月5日(土)、6日(日)に東京外国語大学で開催、25の報告と4パネルのほか、記念講演について企画を検討中との報告。

(2)秋の研究部会開催報告と春の研究部会開催予定(浦部、田中、村上理事)

・東日本部会、中部日本部会、西日本部会の各担当理事より報告。
・部会での報告者の資格について、原則として会員とし、修士論文の報告者が会員でない場合については、担当理事の判断に任せることとした。

(3)年報第29号の編集状況について(飯島理事)

・11本の投稿原稿がありそのうち6本が2次審査に通過。
・現在印刷を依頼している印刷会社の事情で、別の会社に変更予定。

(4)会報の編集について(狐崎理事)

・研究部会報告、春の研究部会案内、近著紹

介など掲載。春の研究部会開催に間に合うよう発行予定。

(5)学術会議(二村理事長)

・昨年11月8日に開催された地域研究コンソーシアムの報告。

(6)国際交流(石橋理事)

・昨年11月22日に開催された地域研究学会連絡協議会の報告。

(7)会計(星野理事)

・会計報告がありました承された。
・若手支援補助金への応募がこれまでないことから、制度の有効活用について検討した。

(8)メーリングリスト(岸川理事)

・運営委員に関し、3月末で箕輪茂委員は大場樹精委員と交代との報告。
・メーリングリストに新刊紹介を載せる場合は、ラテンアメリカに関する著作で、学会員が編著者であるものに限る。まず、試験的に実施したうえで、継続の可否につき数ヵ月後に理事会で判断する。

<審議事項>

(1)8名の入会が承認され、1名が保留。退会はなし。

(2)FIEALC/CELAOからの協力要請に対して、今後とも学会として広報活動などの面で協力するものの、学会が組織として担当者を決めて、協力することは困難と判断。

(3)リポジトリーの申請のあった論文1件の許諾を承認。

(4)京都大学地域研究統合情報センターから依頼のあった、全国共同利用施設申請について

理事長名で要望書を出すことを了承。

(5)会員名簿を来年度の予算で新規作成。氏名、所属先、専門分野は名簿に極力記載して頂きたいが、会員の連絡先(自宅、勤務先)は従来どおり空欄も可とする。

(6)次期理事会は、2009年6月5日(土)12:00~14:00、東京外国語大学で開催する。

2. 研究部会報告

<東日本研究部会>

2008年12月20日13時から17時20分まで、上智大学四谷キャンパスで開催。3名の報告者を含む14名の参加者の間で活発な議論が展開された。

齋藤報告は現地調査に基づく具体的なもので興味深かった。今後は出席者からの質問(たとえば、慣習に関する住民の共通理解の有無、外部からの人の流入の影響)もふまえ、個別事例の記述にとどまらない地域研究としての位置づけも考えながら研究を進展させてほしい。千代報告も現地での長期滞在に基づく知見が巧みに整理されたものだった。コカ対策の効果および矛盾を地域社会の個別の状況に応じて分析していくことの重要性を痛感させられた。さらなる研究の発展を期待したい。吉川報告は報告者自身が深く関与した劇団招聘の経緯を紹介したものであった。演劇のもつ意味、それを日本に招くことの意義と困難を論じた迫力ある報告で、研究と実践を融合させつつ計画を成功に導いたことに魅力を感じた。以下は報告者自身による要旨である。(浦部浩之：獨協大学)

○「メキシコ、オアハカ州の先住民居住地における集会—慣習による政治と住民の参加—」 齋藤亜子(上智大学イベロアメリカ研究所準所員)

メキシコ、オアハカ州の市町村の多くでは慣習(usos y costumbres)による政治が行われている。usos y costumbresは伝統的な生活習慣の総称で、主に先住民が多く居住する市町村でみられるものである。これらの市町村ではカルゴ・システムと呼ばれる行政・宗教組織が市町村議会の役目を果たしており、市町村選挙も慣習による方法で行われている。また慣習の中にはテキオと呼ばれる公共労役制度やコオペラシオンと呼ばれる共同拠出金の制度によって住民が市町村の財資源の一部を補う仕組みがある。このような市町村の一つであるテオティトラン・デル・バジェでは物事を住民の同意を得たうえで決めている。本報告では、テオティトラン・デル・バジェで行われた行政運営に関する集会の例を挙げ、住民の意見が重視される理由としてカルゴ・システムによる村議会の在り方やテキオやコオペラシオンを通じての住民の協力があることを示した。

○「コカの代替開発プロセスにおける諸問題—コロンビア・ボリバル県南部の事例を中心に」

千代勇一(上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科博士課程)

コロンビアでは1970年代に麻薬コカインの生産が始まり、80年代のコカイン・カルテルの隆盛を経て、90年代には原料となるコカ植物の栽培面積が急増した。これに対して政府は、除草剤などによるコカの駆除を進めるとともに、コカ栽培農民にコカに代わる生産手段の提供を模索してきた。本発表では、コカ栽培の変遷と政府の対策を概観したのち、現地調査の結果をふまえて、地域社会に対する代替開発のインパクトについて報告した。国内有数のコカ栽培地であるボリバル県南部において、政府はプロジェクトを成功させるために、経済発展のポテンシャルのある地域にのみ代替開発プロジェクト導入し、非合法武装組織が存在し開発が困難な地域には除草剤の空中散布だけを行っている。このため、コカ栽培地域は開発の都合によって二分され、除草剤の散布だけが実施されている地域では、生産手段を失った農民が国内避難民となる状況が生じていることを指摘した。

○「コロンビア演劇人来日を振り返って—市民グループによる文化交流事業の成果を考える—」 吉川恵美子(昭和女子大学)

2008年10月、南米コロンビアから二人の演劇人が来日した。劇団「テアトロ・ラ・カンデラリア」の演出家であるサンティアゴ・ガルシア氏と、コロンビア演劇同業者協会CCTの代表を務めるパトリシア・アリス氏である。来日事業に大きく関わったある市民グループの輪郭を紹介し、来日プログラムの内容について報告した。コロンビアから劇団を招聘しようとする企画が立ち上がったのは2006年春であった。世田谷パブリックシアターの演劇ワークショップの場で偶然出会った演劇関係者と研究者が集まり、ラテンアメリカ演劇研究会が発足した。さらに、劇団招聘企画が誕生した。2008年には上記二名の来日を実現させ、さらに2010年の劇団来日が視野に入ってきている。ラテンアメリカ演劇に対する関心の裾野を広げることを主眼に置く市民グループの活動の意義は大きい。ボランティアという性格と責任ある活動の刷り合わせが今後の課題となる。

〈中部日本研究部会〉

2008年12月13日(土)14:00から 17:00まで、中部大学名古屋キャンパス5階、501講義室において、中部日本部会研究会が開催された。研究報告は2名で、参加者は7名であった。当日はラテンアメリカ関連のシンポジウムや研究会が重なったこともあり、参加者は少なかつたものの、2件の報告は比較的近いテーマだったため、非常に内容の濃い、有意義な議論ができたと思う。

今回の報告は、いずれも植民地期のメキシコを中心に研究を進めてきた報告者が、これまでの研究成果をベースにして、それぞれ新たな展開を模索しようとした意欲的な発表であったといえる。「Eduardo Tamariz作品に見るネオ・ムデハル様式 —メキシコ プエブラ市の事例—」と題した金澤報告では、19世紀後半以降のメキシコで展開した歴史主義運動のひとつの表現としての、プエブラ市におけるネオ・ムデハル様式建築の採用を、エドゥアルド・タマーリスというひとりの建築家の作品に注目して考察しようとしたものである。また、「メキシコの「聖フェリーペ・デ・ヘスス崇拝」近年の動向 —ミチョアカン州の事例から—」と題した川田報告は、現在もメキシコで細々と続けられている聖フェリーペ・デ・ヘススへの崇拝の現状を、ミチョアカン州でのフィールド調査の結果を通して紹介したものである。

いずれの報告も、端緒についたばかりの研究であり、今後さらなる文献調査やフィールド調査を通して明らかにしてゆくべき課題を、今回の議論の中で明確にできたことは、報告者にとっても非常に有益であったものと思う。以下は報告者自身による発表要旨である。(杓谷茂樹：中部大学)

○「Eduardo Tamariz作品に見るネオ・ムデハル様式—メキシコ プエブラ市の事例—」

金澤 雅子 (中部大学大学院国際人間学
研究科博士後期課程)

19世紀半ば、スペインでは古典主義脱却を目指して歴史主義運動と独自の国民建築の探求が勢いを増した。歴史主義運動によって中世を振り返ったスペインは、イスラム文化の混入こそが自国の独自性であることを認識していく。1844年、合理主義と歴史主義を理念としたマドリッド建築学校が新設された。歴史主義追求の過程で、この学校がネオ・ムデハル建築様式を誕生させるこ

ととなった。メキシコでも19世紀後半から歴史主義建築が導入されていく中で、プエブラ市では公的施設をはじめ、個人邸宅へとネオ・ムデハル様式が採用された。これほどの広がりを見せたのはメキシコ国内でも同市だけである。

本発表では、2008年1月に同市でおこなった現地調査をもとに、ネオ・ムデハル様式の広がりやプエブラ市建設の歴史との関係を探る第一歩として、同様式をメキシコに導入した第一人者である建築家エドゥアルド・タマーリスの生涯と主な作品6点を紹介した。

○「メキシコの「聖フェリーペ・デ・ヘスス崇拝」近年の動向 —ミチョアカン州の事例から—」

川田 玲子 (名古屋短期大学非常勤講師)

メキシコ・ミチョアカン州における「聖フェリーペ・デ・ヘスス崇拝の現状」に関する報告である。2007年夏及び2008年春・夏に同州北部の11市町村でフィールド調査をした結果、フェリーペ像が祀られている教会堂がこれまでに18程確認された。そのうち半数は、比較的新しい教会堂で、聖フェリーペ・デ・ヘススの名を冠している。また現地関係者とのインタビューから、同聖人の祝日にあたる2月5日には、地域の人々が協力し合って宗教行列を出すなど大掛かりな祝祭行事をおこなっていることがわかってきた。その他、願掛けをし、その願いがかなったときにお礼に奉納される“milagros”がいくつか掛けられているフェリーペ像があることも判明した。

引き続き調査をおこない、17世紀に始まり、独立後下火となっていた聖フェリーペ・デ・ヘスス崇拝が、これらの地域で近年になって始まった理由、その社会的役割を把握し、崇拝の新しい一面を考察していきたい。

〈西日本研究部会報告〉

2009年1月10日、午後1時半から5時半にかけて、神戸大学大学院国際協力研究科において開催された。3名の報告者と16名の参加者の間では、分野および対象国が異なる発表をめぐり活発な議論・質疑応答が行われた。最初の真鍋報告は、ペルー・シエラ南部プーノ県における社会経済的変化を、南米ラクダ科家畜をめぐる諸問題に焦点を当てて論じた。現在と過去のプーノ県の社会・産業構造比

較、および農地改革や土地所有構造といった歴史的環境の変遷が紹介された後、収入の不安定性や貧困といった、アルパカ毛の小規模生産者として生計を立てるシエラ農民が直面する問題が紹介された。アルパカ毛生産者の規模、品質評価の方法、仲買人の出自・役割等について質疑応答が行われた。また、同地域におけるラバの希少価値についての新たな研究成果報告に対して、多くの参加者から関心が寄せられた。次の住田報告は、詳細な一次資料に基づいて、2002年に誕生したルーラ政権に見られる「秩序と進歩vs.社会正義」の構図についての分析を行った。具体的に、1930年のヴァルガス革命以降、実証主義に依拠する「秩序と進歩」の道を行ってきたブラジルでは、カルドゾ、ルーラ以降、「社会正義」の実現が重要視されるようになったが、社会改革の成果は不十分である点が指摘された。2002年と2006年の大統領選挙における選挙キャンペーン比較、油田やエタノール等の資源戦略、ルーラ政権の大衆動員戦略等、ルーラ政権下の政治経済体制についての質疑応答が繰り返された。最後の岡部報告は、1994年末に発生したメキシコのペソ危機後の金融再建が、政府主導で行われつつも外国銀行の大幅参入を認めるという方法で行われたことについて、この政策選択は1950年代末に成立した「政府吸収型金融システム」の特徴によって経路依存的に決定されたことを、タイ、韓国の事例との対比で論じた。比較歴史分析の手法を用いた報告に対して、危機後の金融再建のあり方は、危機発生時における金融機関のバランスシート状況によっても左右されるのではないかと、新自由主義経済改革という大きな流れの中で他の選択肢がなかったと考えられるのではないかと、等の掘り下げた議論が展開された。以下は各発表者から提出された要旨である。

(高橋百合子：神戸大学)

○「ペルー・シエラ南部プーノ県の社会経済的变化の研究—南米ラクダ科家畜をめぐる諸問題を中心に—」

真鍋周三 (兵庫県立大学経済学部)

現在のプーノ県を代表する獣毛産業の実情を植民地時代などとも比較しながら、南米ラクダ科家畜とくにアルパカの毛の生産と市場への供給をめぐる、毛の生産者であるシエラ農民がおかれている状況を考察した。

○「ルーラ政権のブラジル—秩序と進歩vs.社会正義」

住田育法 (京都外国語大学外国語学部)

1930年以降ブラジルは、工業国として「秩序と進歩」の道を行ってきた。やがて1988年公布の民主憲法の下で、庶民派の大統領カルドゾやルーラが登場する。このルーラ政権の「秩序と進歩」vs.「社会正義」の構図を考える。

○「ペソ危機後のメキシコ金融再建—韓国、タイとの比較歴史分析」

岡部恭宜 (東京大学社会科学研究所)

本研究は、メキシコのペソ危機後の金融再建が、政府主導で行われつつも外国銀行の大幅参入を認めたことについて、経路依存性アプローチおよび韓国やタイとの比較の観点から、その歴史的、政治的な起源を分析する。

3. 研究部会開催案内

以下の要領で春の部会研究会が開催されます。皆様ふるってご参加ください。

○東日本部会

日時：2009年3月14日(土)13:00～18:00

場所：早稲田大学早稲田キャンパス14号館
10階1046号室 (東京メトロ東西線早稲田駅)

発表者・題目

1. 駒井陸子 (東京大学・院生)
「鉄柵を越えて—Alfonsina Storniの詩の道程—」
2. 大場樹精 (上智大学・院生)
「『アルゼンチン国民』創造／想像過程の分析—ファン・パウティスタ・フスト(1865-1928)の著作を通して」
3. 和田佳浦 (早稲田大学・院生)
「メキシコ・チアパス州農村における州内移動と先住民共同体の変容」
4. 青沼高志 (東京外国語大学・院生)
「貧困撲滅プログラムが移民に及ぼす副次的効果—メキシコ・Progres-Oportunidadesの事例—」
5. 舛形周一郎 (上智大学・院生)
「ブラジルにおける難民保護政策の形成—国際人権規範の国内受容と多元化する政策決定過程—」
6. 磯田沙織 (筑波大学・院生)

「アウトサイダーとその後—ヘルーにおける代表制の危機とフジモリ以降の政治変化—」

7. 井垣昌 (ラテンアメリカ社会科学大学院 (FLACSO) アルゼンチン学術支部・院生)
「インフォーマントとしてのコカ葉使用者へのアプローチ—アルゼンチン・コルドバ市への移民を対象とした事例—」

問い合わせ先: 浦部浩之

urabe@dokkyo.ac.jp

○中部日本部会

ラテンアメリカ社会文化研究会との協力で開催します。

日時: 2009年4月11日(土)13:00~17:00

場所: 中部大学名古屋キャンパス (JR中央本線 鶴舞駅名大病院口(北口)下車すぐ) 610講義室 (以前お送りしたメールリングリストでは510教室とご連絡しましたが、訂正いたします)

〒460-0012 名古屋市中区千代田五丁目14番22号 TEL.052-251-6336
FAX.052-251-6326

報告者・題目

1. 上原なつき (南山大学大学院)
「インカ王のミイラに関する文化人類学的考察」
2. 角友恵 (愛知県立大学大学院)
「テオティワカンの蝶」
3. 野内遊 (名古屋大学大学院)
「メキシコ北部国境都市の発展と諸要因」
4. 小松仁美 (淑徳大学大学院)
「メキシコ合衆国首都DFにおけるストリート・チルドレン—生活史調査に基づく事例研究から」

問い合わせ先:

中川智彦

m-nkgw@chukyogakuin-u.ac.jp

杓谷茂樹

shakuyas@intl.chubu.ac.jp

○西日本部会

日時: 2008年3月28日(土)13:30~17:00

場所: 神戸大学六甲台キャンパス第5学舎 (国際協力研究科棟) 207号室
(阪急「六甲」駅、JR「六甲道」駅、または阪神「御影」駅より市バス36系統「鶴甲団地」行乗車、「神大正門前」で下車)

報告者・報告題目

1. 内山直子 (神戸大学大学院国際協力研究科 博士課程)

「ハイチの貧困と所得格差—一家計調査データをを用いて—(仮)」

2. 藤川久美 (神戸大学大学院国際協力研究科 博士課程)

「デカセギ労働者の定住化—在日ブラジル人の事例から—」

3. フランクリン・アルカラ (神戸大学大学院 国際協力研究科 研究生)

「国際ビジネスを介した地域開発—アンデス穀物の場合—」

問い合わせ先: 高橋百合子

ytakahashi@people.kobe-u.ac.jp

4. 近著紹介

禪野美帆「メキシコ、先住民共同体と都市—都市移住者を取り込んだ「伝統的」組織の変容」
慶應義塾大学出版会、2006年、213頁
齋藤亜子（上智大学イベロアメリカ研究所準所員）

本書は、メキシコ、オアハカ州の先住民村落から都市へ移住した人々と、カルゴ・システムの関係を分析したものである。カルゴ・システムは、植民地時代のスペイン支配に起源をもつ行政・宗教的組織であり、現在もラテンアメリカの先住民村落に数多く存在する。村長をはじめとする村議会議員や宗教的な祭礼の責任者などは、カルゴ・システムを形成する階層性を伴う役職であり、村人が1年から3年の任期を交代で担うものである。通常これらの役職は無償であり、村人にとって役職を担うことは大きな負担となっている。

本書の目的は、メキシコ、オアハカ州の一村で先住民ミシュテコ人の住む、サン・マルティン・ウアメルパンを事例として、カルゴ・システムと村から都市へ移住した人々との関係を考察することにある。同時に、「先住民」や「ミシュテコ人」などといった一つの単位でくくられがちな村人達が、実際にはどのような我々意識を持っているのか、さらに村出身者が日々の生活の中で得る現金収入、村人の中で得る威信や権威、村で育っていく中で身に付いた行動・思考形態を、それぞれ「経済資本」、「象徴資本」、「文化資本」と概念化し、それらが村人の人生にどのような意味をもっているのかを考察することによって何故都市移住者が村との関りを保ち続けていくのかを明らかにすることにある。

本書では、まず第1章で研究の目的が明らかにされ、従来の村落—都市関係研究とカルゴ・システム研究の検討、次いで経済資本、象徴資本、文化資本という概念の説明が先行研究の検討と共になされている。

第2章「サン・マルティンの地理的・社会的環境」においては調査地であるサン・マルティン・ウアメルパン村(以下、著者の記述に従ってサン・マルティンと略す。)の地理的な位置や規模といった基礎情報と住民の生活が述べられている。

第3章「サン・マルティン在住者の我々意識」では村人を先住民あるいはインディヘナとする、外部からの識別方法に触れた後、当事者である村人が自らをどのように捉えているのかを描写している。複数の我々意識があるものの、村人にとって一番強いのは「サン・マルティンの者」という意識であることが明らかにされており、これが村在住者と都市移住者の共通意識であることがうかがえる。

第4章「都市移住の様相」では、サン・マルティンから都市部へ移住した人々の生活

の様子が村在住者の生活との比較で描かれており、何故都市に働きに行くのかについての詳しい記述がされている。同時に都市移住者の村への帰属意識についても述べており、村との関係を保つためには村への貢献が必要であることが示されている。

第5章「都市移住者と村在住者の組織関係」では、カルゴ・システムを媒体とした村在住者と都市移住者の関係を検証している。都市移住者はサン・マルティンのカルゴ・システムと密接なつながりを持つ組織をつくり、村との関わりを保っている。5章の後半では、著者の参与観察を基に村の祭礼と、カルゴ・システムの役職である村長選出のプロセスが詳細に報告されている。無償で負担の大きい村長に選ばれた人ががっかりして終る話は先住民村落の研究者でなくとも興味深く読むことができよう。

終章の第6章ではカルゴ・システムが、その役職の負担の大きさによって、村人に役職を逃れるための移住を選択させてしまうという、都市移住者を生むひとつの要因となっている側面と、その一方で村の一員であり続けたい都市移住者に村へ貢献する媒体を提供する面を持つことを明らかにし、それが村落と都市の紐帯になっていると分析している。さらにそれは村人の、村に犠牲を払って奉仕する「文化資本」によって都市で得た「経済資本」が村人としての威信である「象徴資本」を得るために村に渡されるという一連の動きとして考察されている。

本書は、著者が第1章の調査方法で明らかにしているように、長期にわたる現地調査を基に書かれたものである。村人との信頼関係を築くことによって可能であったと思われる詳細な記録は、フィールド・ワークを行う他分野の研究者にも参考となるであろう。また、著者も述べているように、従来のカルゴ・システム研究は、その村落内での役割や機能などに焦点を当て、村落を閉鎖的な共同体と捉えるものが殆どであった。本書の意義は、これまで見られなかった都市移住者との関係を分析することによって、カルゴ・システム研究に新たな視座を示していること、またこのような分析によって先住民村落の実態を多方面から読み取っているところにある。

近年、先住民村落からの移住者は増える一方であり、外部から閉ざされた村落は稀である。今後の先住民村落に関する研究は村落の外部(都市部)との関係を無視することはできないであろう。本書はその点で大いに参考となる文献である。

5. 事務局から

- ・所属・住所等に変更が生じた場合は、速やかにその旨、事務局までご連絡ください。なお、その際、個人情報保護の観点から、会報掲載への可否を必ず付してご連絡ください。
- ・本学会メーリングリストに登録されているメールアドレスに変更があった際にも事務局までご連絡ください。戻ってくるメッセージが多数見受けられますので、よろしくご協力のほどお願いいたします。
- ・新規にメーリングリストに登録をご希望の方も、メールアドレスを添え事務局までお知らせください。
- ・新年度に当たり、学生会員から一般会員への切り替えが必要な方につきましても、事務局までご一報いただけるようお願い申し上げます。速やかにご連絡いただけない場合、会費差額を過去に遡ってご請求することになりますので、よろしくご協力ください。

I. 会員関係

II. 会員の仕事など（事務局宛送付分）

- 石井章『ラテンアメリカ農地改革論』学術出版会、2008年。
- 北野収『南部メキシコの内発的発展とNGO：グローバル公共空間における学び・組織化・対抗運動』勁草書房、2008年。
- ソル・ファナ（旦敬介訳）『知への賛歌：修道女ファナの手紙』光文社古典新訳文庫、2007年。

※訂正 前号でご紹介した『征服者ピサロの娘』の著者名は、正しくは「マリア・ロストウオロフスキ」でした。訂正してお詫び申し上げます。

会費納入のお願い

2008年度の会費を未納の方はお納め願います。なお、会費を連続して2年間、無届にて滞納した場合は、理事会の議決をもって除名することがあります（会則11条）。2007年度分までに未納がある会員は、未納分を含めてお納め願います。

口座記号番号：00140-7-482043

加入者名：日本ラテンアメリカ学会

若手支援制度への積極的な応募を。

2008年度より、若手研究者を対象に国際学会での報告旅費を支援する制度が発足しましたが、これまでのところ応募がありません。LASAなどでの報告を予定されている若手研究者は、ぜひ本制度にチャレンジしてください。申請先は国際交流担当の石橋純理事です。

日本ラテンアメリカ学会 若手支援制度

2008年6月7日

第29回定期大会総会で承認

1. 目的：本学会員の若手研究者を支援し、国際交流に資すること。
2. 対象：国際学会(国外)での報告を目的とする旅費の補助。
「旅費」には宿泊費を含むが、食費等滞在費一般は含まない。
助成対象は各会計年度3名を目安とする。
3. 補助額：一人あたり10万円以内。国際学会報告実施後に支給。
4. 申請資格：申請時点で会員歴2年以上。
年 齢：原則として35歳以下。
職 業：常勤職に就いていないこと。
5. 申請時期：国際学会開催の1ヶ月前まで。
6. 申請時の提出書類：①学会の定める申請書。
②申請者の氏名や発表題目が記載されたプログラム、または申請者に対する招聘状など予定されている報告を主催者が証明するもの。
7. 助成金を受けるための条件：
国際学会での報告後3ヶ月以内に下記の書類を提出。
①国際学会参加記、あるいは同学会報告要旨あるいは全文(本学会「会報」あるいは「年報」用の原稿として)
②旅費にかかわる領収書(コピー不可)および航空券の半券。
8. 選 定：①各会計年度内に2回を目処に助成対象候補者を集約し、理事長・会計担当理事・国際交流担当理事の3名により書類審査にて決定。
②応募者が同一会計年度に3名を超える場合、あるいはすでに助成を受けた経験のある者の処遇等についても、上記3名の判断により柔軟な対応を試みる。
③選定結果については、会報にて全会員に告知する。
9. 実施の開始：2008年度総会に提案し、同年度より実施する。

編集後記

春の研究部会には、多くの院生・若手研究者が学会デビューとなる報告を行います。わが身を振り返ると、20年も昔の出来事になりますが、尊敬する先生方からたくさんの質問や励ましの言葉を受けて感動したことが想い起されます。お忙しい時期でしようが、ぜひとも各部会へのご参加を切望いたします。
(狐崎)

No.98

2009年3月6日発行

学会事務局

上智大学イベロアメリカ研究所

〒102-8554 千代田区紀尾井町7-1

TEL 03-3238-3530

FAX 03-3238-3229

E-mail : tani-hi@sophia.ac.jp